旭川医科大学研究フォーラム 12　：131 ～ 132，2011

学界の動向

医療薬学フォーラム 2011 / 第 19 回クリニカルファーマシーシンポジウムを開催して

田　崎　嘉　一　松　原　和　夫*

本シンポジウムは、日本薬学会医療薬科学部会の主催によるシンポジウムであり、今回の 19 回目は、旭川にて平成 23 年 7 月 9、10 日に旭川市民文化会館・旭川グランドホテルを会場に開催されることとなった（実行委員長　松原和夫）。本シンポジウムは、日本病院薬剤師会、日本薬剤師会が共催し、日本医療薬学会など薬学関係の様々な学会と旭川市が後援する学会で、全国から多くの医療系の薬学関係者、すなわち、病院薬剤師、薬局薬剤師、薬系大学教員などが集まり、医療について議論をする場である。今回は、震災の影響もあり参加者が例年より減少したものの、約 1200 人もの参加者があり、盛況に開催することができた。

本シンポジウムのメインテーマは、「薬学六年制の夜明け」とした。来年度から誕生する薬学六年制卒業の新しい薬剤師に対しても、夢ある活躍の場を提供できるようにと各個別の 13 シンポジウムを企画した。特別講演として、旭山動物園園長、坂東元氏に「伝えるのは命の輝き」というタイトルのご講演をしていただき、動物の死に常に向き合っている体験談などから、あらためて命について考える機会を得ることができたと思う。教育講演では、厚生労働省大臣官房審議官の平山佳伸氏に、「医薬行政の今後と薬剤師」、医薬品医療機器総合機構（PMDA）審査マネジメント部長の磯部総一郎氏に「PMDA の業務と今後の薬剤師に期待するもの」という演題でご講演いただき、今後の薬剤師のあるべき方向についてのお話をいただくことができた。以上の特別講演、教育講演は、いずれも参加者から大変好評であった。

各個別のシンポジウムは、以下の通りである。1. がん薬物療法の薬学的ケア、2. 創薬育薬チームにおいて薬剤師が関わる臨床研究最前線、3. すぐに役立つ感染制御 - 理論より実践 - 、4. 腎機能低下患者における薬物の適正使用に向けて、5. 妊婦・授乳婦への薬物療法～汎用薬のクリニカルマネージメント～、6. 救急・集中治療領域における薬剤師の役割と教育、7. がん専門薬剤師養成におけるメンターシップ、8. 病院薬剤師によるドラッグ・リプロファイリング、9. 参加型シンポジウム　スポーツファーマシスト - 観るスポーツから支えるスポーツへ、10. 薬剤師の専門性を活かした緩和医療への取り組み、11. 新しい教育を受けた薬剤師に期待するもの～安心・安全な薬物療法を提供する上で取り組むべき課題～、12. 新たな精神科医療への挑戦、13. 世界の臨床薬学から学び、伝える。

以上のシンポジウムは、4 人から 6 人のシンポジストで構成され、総合討論では各個別の課題において活発な議論が行われていた。現在、関心の高い専門薬剤師に関連したテーマと今後の薬剤師の活躍を期待するテーマが取り上げられた。

現在、日本病院薬剤師会および日本医療薬学会が認定する専門薬剤師（薬物療法認定薬剤師を含む）は、５つの領域があるが、このうち、がん、感染制御、精神科、妊婦・授乳婦の専門領域に関するシンポジウムを開催できたことは、専門薬剤師を目指す参加者にとっても大変役立つものであったと思われる。特に、がんについては、単位認定される講演会が全国的に少ない中、2 つのシンポジウムを単位認定シンポジウムとして開催できたことは高く評価された。また、米国 Memorial Sloan-Kettering Cancer Center から米国のがん

*旭川医科大学　病院薬剤部

専門薬剤師であり、当該施設のがん専門薬剤師養成責任者でもある Nelly G. Adel 氏を招待し、米国におけるがん専門薬剤師の活動状況を聞くことができた。言うまでもなく、臨床薬剤師やがんなどの専門薬剤師は米国が発祥の地であり、彼らの活躍が、医療に大きく貢献してきた。従って、彼らの活動や教育方法は、今後の日本における活動にも参考になった部分が多かった。また、臨床薬剤師に関連する演題も随所にみられた。臨床薬剤師として病棟に常駐し、医師など他の医療職種と協働して薬物治療を安全に行うことは、今後の薬剤師の活動分野として重点が置かれている分野でもあり、非常に関心が高かった。

さらに、これからの薬剤師には、研究マインドが求められている。臨床上直面する種々の難題を解決するためには研究能力が求められているが、当シンポジウムでも薬剤師による臨床研究の演題が取り上げられた。病院薬剤師によるドラッグ・リプロファイリングのシンポジウムでは、すでに上市されている医薬品を適応以外の薬効として利用できないかを応用研究して、治療に役立てるという演題が複数発表された。この分野は、今後の薬剤師が積極的に取り組んでいくべき課題であると思われた。

一般演題については、ポスター発表のみで開催したが、276 題もの演題が出そろった。特に、東日本大震災から 4 カ月後に開催された学会でもあり、22 演題が震災後の薬剤師活動の内容であった。救急・集中治療のシンポジウムにおいても議論されていたが、限られた医薬品から処方に適合したものを適切に選択するだけでなく、場合によってはジェネリックや市販の医薬品の中から代替品を見つけ出していくことで、災害医療に大いに貢献することができたという発表があり、薬剤師としての活躍の場として参加者の多くが認識できたことは、意義深かったと考えられる。

以上のような内容で 2 日間に渡った本シンポジウムは、予想以上の成功を収めて終了した。

最後になりましたが、本シンポジウム初日プログラム終了後の懇親会には、本学学長の吉田晃敏先生に御足労いただいて、ご祝辞をいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。本シンポジウム開催に関してのみならず、薬剤部の業務展開を高く評価していただくお話しをいただき、薬剤部スタッフ一同、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

薬剤部スタッフ一同